

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 歴史哲学としての〈批判=批評〉理論

— 初期ヴァルター・ベンヤミンの思想形成 —

氏名 内村 博信

本論文は、ヴァルター・ベンヤミンが『ドイツ悲劇の根源』(1925)を教授資格論文としてフランクフルト大学に提出し、最終的に受理されることなくとり下げ、アカデミズムの世界から文筆家の道を選択するにいたるまでの初期の作品を対象に、その思想を〈批判=批評 Kritik〉と歴史哲学という観点から論じたものである。ベンヤミンは初期の一連の作品で、第一次世界大戦からその後の混乱期にかけて近代市民社会のかかえる矛盾がさまざまなかたちで噴出する時代に、近代市民社会がどのような特徴をもつのか、どのような原理のもとに形成されているのか、その原理はいかなる問題を内包しているか、どこに再構築のための視点を見いだせばよいか、という問題を、芸術批評・法・言語の領域において問いかけている。本論文は、初期ベンヤミンの思想をこれらの観点から論じる(第一章、第二章、第三章)と同時に、その背景にある歴史哲学の意味を明らかにし(第四章)、そこに通底する〈批判=批評〉理論について検討する(終章)。とくに新カント派、その流れをくむ法実証主義、さらにこの時代に新カント派と共通する科学主義的な思想的潮流のなかにあった論理実証主義との対比のなかで、ベンヤミンの思想を明らかにすることを試みる。

第一章では、『フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩』(1914-15)、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(1919)、『ゲーテの親和力』(1922)を中心に、芸術批評の理論について論じる。ベンヤミンがこれらのテキストで批判の対象とするのは、新カント派の理論と、そうした議論に対抗するかたちで現われてくるディルタイやグンドルフの精神史学派の議論である。ヘルマン・コーエンなどの新カント派は、認識・倫理・美の領域をそれぞれ区別し基礎づけようとするが、ベンヤミンはまずそうした議論に対して、むしろ芸術作品などの美的領域のなかで問われるべきなのは倫理の問題であることを示そうとする。他方、ディルタイやグンドルフが倫理的な問題を、作品のなかで作家の生を追構成することによっ

て示そうとするのに対して、近代社会では美が宗教的な関心から解放され、美の領域が自律的なものと考えられるようになると、倫理的な問題が美にとってますます潜在的なものとなって現われてくることを、つまり芸術作品のなかで問われるべき思考形態として構造化されてくることを、ベンヤミンは明らかにしようとする。本論文では、ベンヤミンがゲーテに代表される古典主義の芸術理論と、ノヴァーリスやシュレーゲルに代表される初期ロマン主義の芸術理論とを対比的に論じている点を検討することで、思考形態として構造化された作品の領域と、その構造を問う〈批判=批評〉の領域との関係をどのように理解しているかを明らかにする。

第二章では、『暴力批判論』（1921）と『ドイツ悲劇の根源』のギリシア悲劇と近代悲劇を比較している箇所を中心に、ベンヤミンが論じる神話・法・政治について検討する。法的な暴力に関するベンヤミンの議論は、ヴァイマル期に法学の世界で絶大な影響力をもっていた、新カント派の流れをくむハンス・ケルゼンに代表される法実証主義と、ケルゼンを批判するカール・シュミットの決断主義との対立を背景に理解する必要がある。ベンヤミンはまず暴力批判論のなかで、法規範を「法措定的暴力」と「法維持的暴力」といった法の力との関係において問うのだが、この問題設定はケルゼンが「純粹法学」として展開する法理論、すなわち法規範は効力をもつがゆえに正当であるとし、法命題と法規範の関係を問う法理論とは対立するものと考えられる。他方、ベンヤミンは法と法の力のあいだの関係を相互に矛盾する可能性を秘めたアポリアとして問うのだが、それはシュミットの決断主義と対立する。つまり、シュミットはケルゼンの法理論では法がなぜ効力をもちうるのか理解できないことを批判し、例外状況に関して決定を下す者が主権者だと主張することで、主権者の決断こそが法を効力のあるものにする다고説明するのだが、ベンヤミンは近代法では主権者が法の淵源であるとしてもその能力をもたないことに近代的な主権に内在するアポリアを認め、そこに近代法における「法=権利」の特徴とその問題点を、さらに近代国家において法的暴力が発生する要因を見いだすことになる。ベンヤミンは、そうした暴力に対抗するものとして「神的暴力」を、法を「解除=脱措定 *Entsetzung*」する力として対置するのだが、それは主権のアポリアを、シュミットのように主権者に決定を下す権限をあたえることで解消するのではなく、法に内在するアポリアを〈批判=批評〉的な力として再構成することで、近代国家における法的暴力の機構からの解放の可能性を問うのである。

第三章のテーマは言語論だが、ベンヤミンの言語論の特徴は、語さらに固有名を言語理論の中心におくことによって新しい言語論を構想しようと、とくに「固有名 *Eigenname*」の理論を歴史哲学的に論じようとする点にある。こうした議論は当時、ラッセル、フレーゲ、ヴィトゲンシュタイン、カルナップなどによる、文を単位として論理的命題を分析することをつうじて言語論を展開する論理実証主義の議論に対立する。ベンヤミンは初期の言語論

『言語一般と人間の言語について』(1916)で、言語において伝達されるべきものは、言語そのものではなくその言語とは区別される、にもかかわらずその言語の外には存在しない、という「逆説性」から、言語一般に認められる表現という性格と、固有名に認められる指示の可能性という性格を導きだす。さらにベンヤミンは『翻訳者の使命』(1921)で、固有名の指示は、ある絶対的な「要請」、「神の記憶への指示」のもとにあたえられるはずのものであり、生や出来事は固有名のもとにその唯一性において、さまざまな同一化の暴力を免れたところに指示されるべきものである、と論じる。ベンヤミンはそこで「補完」という概念をつうじて、一般名の指示と固有名による指示との、「類型」的な指示と唯一的な指示とのあいだのアポリアを説明する。一般名の指示は共同主観的に、あるいは伝達の連鎖のなかで固定されているとはいえ、その指示の諸条件は十分なものではなく、かならず互いに矛盾したものを含んでいる。「神の記憶への指示」、あらゆる生あるいは出来事が、その唯一性において指示されなければならないという要請こそが、指示の諸条件を互いに矛盾するとしても肯定しあえるものに、互いに補いあい符合しあうものにする。はじめから生は、また出来事はその特異性、唯一性において指示されているわけではないとしても、その特異性、唯一性において指示される可能性なしには、言語もまた歴史も考えることができない。生あるいは出来事のその唯一的な指示は、歴史的に「解決」として見いだされるべきものだということである。

第四章では、ベンヤミンが『ドイツ悲劇の根源』で論じる「<sup>トラウアーシュービール</sup>悲劇」の意味、さらにメランコリーとアレゴリーの意味を明らかにすると同時に、ドイツ・バロック悲劇に内在する歴史神学の意味を問うことで、ベンヤミンの歴史哲学が一九二〇年代において担う意味について検討する。ベンヤミンはドイツ・バロック悲劇の諸特徴を決定している要因を、キリスト教文化と古典古代の異教文化との対決、キリスト教的な罪と「<sup>デモーニッシュ</sup>魔神的な運命という観念、そうした観念の背景にある自然と歴史に関する考え方に認めている。その際、ドイツ・バロック悲劇における君主のメランコリー、「決断力のなさ=優柔不断」と、諸々の「はかなさ *Vergänglichkeit*」と凋落のアレゴリー表現を形成しているのは、宗教改革以降のプロテスタント的な、けっして浄化されることのない「罪=負債 *Schuld*」の意識であると論じるのだが、そこに「はかなさ」という観念と結びついたバロックの歴史神学を認める。ベンヤミンはドイツ・バロック悲劇に歴史神学を見いだすことで、政治神学とオイコノミア神学という西欧の二つの政治的パラダイムに歴史という概念を対比的に導入するのである。政治神学に歴史の概念を対置することは、主権に対して生あるいは出来事の唯一性、特異性について問うことを意味する。それに対してオイコノミア神学において歴史を考慮することは、統治の問題を「罪=負債」、精神的な抑圧と資本の蓄積とい

う観点から問うことにほかならない。本論文は、ベンヤミンがドイツ・バロック悲劇の分析をつうじて見いだしているのは近代における民主主義と自由主義のかかえるアポリアであることを明らかにする。

終章では、ベンヤミンの初期の作品に通底する〈批判=批評〉の概念について歴史哲学との関係において検討する。ベンヤミンが弁証法的な思考においてつねにテーゼとして問題にするのがわれわれが受け入れてしまっている現実、その現実が構成される象徴的構造であるとするれば、アンチテーゼとしての〈神的なもの〉は、区別し「決定=決断」する〈批判 =批評〉の、内在的な矛盾を喚起する力として考えられている。アンチテーゼは、それがテーゼを構成する現実の象徴的な構造を逸脱させる力として現われるとき、事物を出来事として、生を出来事の〈歴史的主体〉として構成しはじめる。とすれば、ジンテーゼとして政治的な対象となるのは「はかなさ」であり、「世界政治の課題=使命」は「はかなさを追い求めること」にある。現実をそれを構成する象徴的な構造を逸脱する「はかなさ」のうちに見いだすことが「世界政治」の「課題=使命」だというのだが、ベンヤミンは同時にまたそこに、〈批判=批評〉のさらなる歴史哲学的な「課題=使命」を見いだすのである。